
ハイドロゲン～されど空の高きを知る～

椎野 千洋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイドロゲン～されど空の高きを知る～

【Zコード】

Z4633Q

【作者名】

椎野 千洋

【あらすじ】

すべての事象を管理された時代、国の概念がない世界、水が何よりも尊い日常。少年カインは雲を奪われた空に思いを馳せる。空を飛び世界を見ると。アカネ、シルバとの出会いで世界へ飛び出したカインは、レンと共に一人への助力へ奔走する。世界の真実が眠るリュウキュウで明かされる話。そして海上都市ツバルでの新たな事象。動き出したイズモに振り回される四人はそれぞれの決断と選択を迫られる。今の延長線上にあるかもしれない別世界。荒廃した大地と異常発達した水素文明を舞台にした長編SF。第一部【空想科

学祭2009】参加作品の続編です。

序章

月明かりの照らす砂の隆起が、流れ来る風の圧力によって波模様に削り取られていく中で、闇に溶け込むかのような漆黒の身を持つ一機の飛行艇が音も無く佇んでいた。静寂に包まれたその場所では、風でうねる砂波だけが大地の模様と共に僅かに音を形成していく。

機体の中で静かに目を瞑るカインの耳に、その響きが届いたのは不時着してからずいぶん時間が経過したあとで、小波のようないろいろな音色は心地よく意識を取り戻させる効果があった。

「う……ん。ここは……？ うつ！ 頭が痛い！」

光の無い「クピット内」で身をよじりながら目を覚ましたカインは、朦朧とする意識の中で瞼を開き、同時に襲う頭の鈍痛に驚く。どこかにぶつけたのだろう頭を抑えながら細目で辺りを見回し、自身がどこに居るのか確認しようとした。雲の失われた大地の月光は、暗闇になれない目のカインにはまぶしく感じられ、大地が輝いているように錯覚させる。それでも徐々にではあるが意識がはっきりしていき、今おかれている状況に何故自分がいるのかを認識できはじめた。

「そうか、俺は墜落したのか……！ そうだレン！」

カインは記憶をはつきりさせると同時に、不時着するまで声を張り上げていた同乗者、レンの存在を思い出した。体を固定しているベルトを外し、あわてて複座の後部座席へ乗り出す形になる。

暗闇の中で、レンの顔がうつすらと浮かび上がる。月明かりのせいか青白い肌と全く微動だにしない表情は作り物のように美しく、同時に恐ろしく静かだった。ベルトに固定されているせいか、だらりと体を重力に預けている姿に、カインは思わずぞつとして、すぐさまレンの口元を掌で覆う行為をさせた。

僅かではあるが、掌に温かみのある息吹が確認できる。

「よかつた……生きてる」

カインは安堵する余り、座席のシートにもたれ掛ってしまう。

しばらくなにも考えられずに、そうして干物のように垂れ下がつていたが、ずっと窮屈な格好でいたせいか、どうしても体を動かしたくなつた。いかに体の小さなカインといえど、さすがに長時間の閉所は辛かつた。また、意識がはつきりしてきた今、自分が置かれている状況を把握しなくてはとも思ったのだ。

だからまず初めに、暗闇になれた目で機体の外を再度見渡す。すると相変わらず目がなれていなかつたのか、外の景色は月明かりに照らされて、まぶしいほど燐然と輝き放つていた。それこそ満天の星空が大地に落ちてきたのではないかと思える光景に、カインは一抹の不安を覚えた。

ただ、眩しい中でも墜落した場所がどういう所なのかは何となく分かつた。どこまでも続く隆起を繰り返す大地と、小波のような音色、それは現代の？海？というに相応しい場所、大地の多くを占める、砂漠であることは明らかだつた。

「砂漠に落ちたのか。でもどこだろう。エアーズロックからはかなり離れたよな。あの速度だつたし、大陸じゃないかもなあ」

カインは墜落するまでの記憶をたどる。水素をエネルギーとした自身の飛行艇？ライジン？の驚くべき速度は操縦などという感覚ではなかつた。飛び交う水素艇の合間を稻妻のように走つたあれば、まさに青天の霹靂という言葉の体言であつたと思う。

幼い頃よりなれ親しんだ機体の意外すぎる一面を考えながら、カインはウインドシールドを解放した。考えても今は仕方が無い、自分とレンの心配もそうだし、何より状況を把握して、先に発つた二人の安否も確認しなければならないのだ。考え方の場合はない。そう思った。

外気は生暖かく、風が少々強めに吹きぬける。未だ目を覚まさないレンに配慮しつつ、カインはコクピットから下りていつた。地面の質を確かめるように、ゆっくりとブーツの裏で地面を踏み込む。砂と思える物質は随分と軽いようで、踏み込む足が軽く埋まる。大

分時間もたち、完全に目が慣れた中での目視。カインはただただ驚くばかりだった。遙か先の砂丘も、眼前に広がる波模様の傾斜も、ブーツの上を転がる砂さえもが、月明かりに照らされて輝き放っていたのだ。

「なんだ？ これ。目がなれてなくて光つた様に見えていたわけじゃないのか」

よく見れば、砂漠の砂が今までに見てきたケルマティックの砂のように、土色のものではなく、エアーズロック周辺に広がっていた黄土色でさえなかつた。白、完全な白い世界が広がつていたのだ。カインは嫌な予感がした。おそらく予想が的中するであろう事を覚悟し、確認作業を行つた。地面にしゃがみこむ。操縦桿を握る為の手袋を外す。そして純白の砂を人差し指の腹で撫でるよつに掬い取り、おもむろに口元へ運ぶ。砂にまみれて白く光る指をそつと舌で舐めたのだった。

「やつぱりこれは……」

予感は的中した。同時に最悪な場所に不時着したという事実が力インの胸を締め付ける。すぐに行動を起こさねばならない。そう判断せざる終えなかつた。立ち上がり、急ぎ足で「クピットに戻る。ウインドシールドを開け放しで、カインは同乗者レンの肩をゆすつた。悠長に眠らせている場合ではなくなつたのだ。

「レン起きろ！ 急がないと取り返しが付かなくなる！」

「んーまだ寝てる……」

「馬鹿言つている場合か起きろつて！」

かなり強めに肩をゆすられ、眉をひそめながらレンは目を覚ました。

「ふあ……なんだよ、まだ夜じゃんか。せがまなくたつてあたしはいつも相手してやるつて。だからベットを

「回り見ろ！ 状況思い出せ！」

眠気まなこでレンは言われるままに周囲を見渡す。

「ああ、砂漠に落ちたのか。んんーいい眺めー！」

レンは両手を組んで腕を突き上げる形で背を伸ばす。その落ち着いた猫のような動作に、呆れたカインは、寝起きのレンにもすぐに分かるよつ、先ほど砂をすくつた指を口元に押し付けた。

「むう？」

まるで静かにするよう注意をされたかのように、口元に押し付けられた指を見て、レンはやりと笑みを作ると、ぱくりとその指に食いついた。

「む！ んげえーしょっぱ！ なにすんだカイン！ そんな粗相を躊躇した覚えは無いぞ父さんかなしい！」

「冗談言つてる場合じゃないて！」

レンの口から引っこ抜いた指を、今度は指示するように広大な砂丘群へ向けるカイン。レンはいつもやり取りの変わりに示された指の先を見て、先ほどの砂漠、妙に白い砂漠を再認識する。そして口の中に広がる不快な味とを結びつけ、ようやくカインの言いたい事、自身の置かれている状況とを理解した。

「げ、マジか。最悪じゃんか。早く脱出しないと干からびるか敵に見つかるか一択だねえ」

カインは、それでも軽いレンを見てため息を吐き、レンに答える。「そうだよ。だから寝起きで悪いけど、すぐに機器の確認をしてくれよ。不時着でどこがいかれてるかも分からないんだ」

「了解、ちなみにカインさ、もう降りたんだろ？ その指だとさ。やっぱ全部？ 塩？ なのか」

カインは沈痛な面持ちで頷き返す。

「ああ、間違いない。ここは？ 塩砂？ だ」

幻想的な光景はどこか儂くも美しく、純白の砂丘を彩る。だが、見た目とは裏腹に広がるその大量すぎる塩の山は、侵入者をあつという間に干からびさせる、有名な危険地帯であった。カインもレン急ぐ様に機器をいじり始めるのだった。

早く脱出しなければ、それに、アカネとシルバは大丈夫なのだろう

つかと理由を巡りせながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4633q/>

ハイドロゲン～されど空の高きを知る～

2011年2月9日23時11分発行